

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 20 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370353

研究課題名(和文)16世紀から21世紀までのフランスにおける視覚詩の総合的な研究

研究課題名(英文)A comprehensive study of visual poetry in France from the 16th to the 21st century

研究代表者

MARIANNE SIMON・O (SIMON-OIKAWA, MARIANNE)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・准教授

研究者番号：70447457

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、フランスにおける16世紀以降の視覚詩を研究対象として、文字の視覚性を特徴とする。視覚詩の歴史、視覚詩の視覚性、作者と読者の関係、フランスの視覚詩の国際的な位置づけといった四つの視点から、文学とイメージの関係性について考察するものであった。なかでも、近年発見された新しい資料をもとに、20世紀の詩人ピエール・アルベール＝ピローとピエール・ガルニエの作品研究を進めた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research was to discuss the forms of visual poetry since the 16th century to the present in France. In order to propose a new analysis of the relationship between text and image we concentrated on the way the visual elements of writing are used. We discussed four main points: the history of visual poetry, the use of writing, the relation with the reader, and the place of French poetry in international visual poetry. We discovered many unpublished documents about two poets of the 20th century, Pierre Albert-Birot and Pierre Garnier, which lead us to focus on their works.

研究分野：人文学

 キーワード：視覚詩 ビジュアル・ポエトリー コンクリート・ポエトリー poesie visuelle poesie concrete  
 ピエール・アルベール＝ピロー ピエール・ガルニエ

## 1. 研究開始当初の背景

視覚詩は、口頭で読み上げるのではなく目で見て理解する詩として、古くから存在するジャンルであり、現在はビジュアル・ポエトリー、又はコンクリート・ポエトリー、フランス語ではポエジー・ヴィジュエル (poesie visuelle) 又は、ポエジー・コンクレット (poesie concrete) という名前で知られている。しかし目で見て視覚的に詩を理解するという考え方は、欧米では非常に不自然である。

歴史上で最も古い視覚詩の例としては、紀元前4世紀にエジプトで、ロードスのシミアスという詩人によって作られた作品があげられる。ローマ時代にもラテン語で作られた作品が知られており、中世に入ると、キリスト教的な要素を持つ作品が多くなる。16世紀以降になるとフランス語で書かれた作品が生まれる。

20世紀には、ギヨーム・アポリネールの『カリグラム、平和と戦争の詩 (1913-1916) Calligrammes, Poèmes de la paix et de la guerre (1913-1916)』によって大きな転機がもたらされた。しかし、フランスでアポリネール以後に視覚詩を発表した詩人は、アポリネールから大きな影響を受けているものの、アポリネールの後継者というわけではない。特に、1960年代に世界中に広がったコンクリート・ポエトリーは、アポリネールの試みをさらに一歩進めて、アポリネールの作品に見られる叙情性を排除して、タイポグラフィ、レイアウトを駆使して長い文章と独立した文字の魅力を生かそうとするものであった。

視覚詩の形態とその変貌については、先行研究が幾つか存在するが、その多くは網羅的なものではなく、視覚詩の長い歴史を扱う研究はこれまで行われてこなかった。現在フランス語でも日本語でも、フランスの視覚詩の全体像を問う研究が欠如しており、それが本研究の取り組みに至った背景となっている。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、平成23-25年度基盤研究(C)『19-21世紀のフランスにおける詩と絵画の研究』の成果を踏まえ、文字の視覚性を特徴とする視覚詩を中心に、新たな角度から文学とイメージの関係性を考察することであった。視覚詩の多様性と豊かさを検討するために、視覚詩の歴史、視覚詩の視覚性、作者と読者の関係、フランスの視覚詩の国際的な位置づけという四つの側面から考察することを試みた。

(1) 欧米の視覚詩は古代ギリシャ時代から存在し、フランス語で書かれた作品は16世紀に確認されているが、16世紀から21世紀

までのフランスの視覚詩の歴史はどのような形で展開してきたか(2) 視覚詩の独自の視覚性はどういうものなのか(3) 視覚詩の作者は自分から作品の意味を断定せず、詩の解釈を読者に任せて、読者との新しい関係を作ろうとするが、それはフランスの詩の歴史においてどういう意味を持っているか(4) 視覚詩は世界中の詩人が作っており、その中でフランスの視覚詩の存在をどのように位置づければよいのか、という問いの検討が本研究の目的であった。

## 3. 研究の方法

本研究は文字の視覚性を生かした視覚詩を中心に、新たな角度から文学とイメージの関係性を考察することを目的とし、文献調査に加え、常に新たな視点を追求しながら国際的な研究の発展に努めた。研究の内容に関しては、特に次の点について検討を行った。

文献調査の結果、新しい資料が発見された。2015年にフランスの20世紀のコンクリート・ポエトリーを代表する詩人ピエール・ガルニエの自宅において、数日間に亘る調査を進めた。また、ピエール・アルベール=ピローに関しては、ノルマンディ(フランス)のIMECにおいてこの詩人に関する未発表の資料調査を行った。

視覚詩の歴史については、特にピエール・アルベール=ピローとピエール・ガルニエを中心に20~21世紀における変化を考察した。

視覚詩が持つ視覚性に関しては、文字の塊から輪郭線へ、輪郭線から独立した文字へ、といった形式上の変化を研究した。代表的な視覚詩を幾つか選択し、その特徴を分析した: 文字の形(大文字と小文字、ローマン体とイタリック体)、文字の選択(アルファベット以外の文字の使用など)、配置(空間が持つ役割)、全体の作品がなんらかの物の形を取っているかどうか、など。

作者と読者の関係性については、解釈の過程を分析した。解釈という作業には、作品の空間と媒体が極めて重要な役割を果たしていることを明らかにした。

また、詩人と外国との交流を研究し、視覚詩を介して行われた国際交流の実際のあり方(詩人達の間で行われたやり取り、作品の中で見られる影響等)を調査することによって、フランスの視覚詩の国際的な位置づけを浮き彫りにすることができた。

視覚詩の諸問題を明らかにするためにはグローバルなアプローチが必要であったため、フランス人研究者を東京大学に招聘して、講演会を開催し、情報交換や積極的な国際交流を行った。本研究の成果を公開するため、当初から論文集の刊行に向けて共同研究を進めてきた。テキストとイメージという大き

な枠の中で視覚詩を取り扱うオンライン雑誌の特集号、紙媒体雑誌の特集号を編集（共編）し、国際シンポジウムを主催した。その成果をまとめた論文集『テキストとイメージ - アンヌ・マリー・クリスタンに捧げる』（仮題）は、平成 29 年に水声社から出版される予定である。

#### 4. 研究成果

本研究の実績は、大きく分けて新しい資料の発見、論文と出版、国際交流、の三点である。

文献調査については、予想以上の成果をあげることができた。まず、フランスの 20 世紀のコンクリート・ポエトリーを代表する詩人ピエール・ガルニエに関する多くの未発表の資料と作品が発見された。特に平成 26 年に実施した数日間に亘る調査の結果、屋根裏部屋に残されていた原稿、書簡が見つかり、新たに研究対象とすることができた。それ以降もフランスで資料調査を進め、資料の収集を続けた。また、ノルマンディ（フランス）の I M E C でも、ピエール・アルベール＝ピローの未発表の資料（小説、書簡、インタビューなど）を発見した。

論文と出版については、まず詩の視覚性を部分的な研究テーマとしていた（部分的に扱った）平成 23 - 25 年度の基盤研究 C の成果の一部として『詩と絵 マラルメ以降のテキストとイメージ』と題した論文集（シモン＝及川編）が平成 27 年 5 月に水声社から出版された。また、国際的にも認められているオンライン雑誌『Textimage』の特集（詩と絵、媒体の諸問題、パリ第 3 大学のエレーヌ・カンペニョール＝カテル氏と共編）を編集した（<https://www.revue-textimage.com/sommaire/sommaire.htm>）。ヨーロッパ側からは 14 人、日本側からは 6 人の専門家が参加したこの特集号には、詩の視覚性を扱う複数の論文が掲載された。

ピエール・アルベール＝ピローの研究を進めて、6 本の論文を発表した。またピエール・ガルニエについての研究も進め、平成 26 年 9 月アミアン（フランス）で開かれた展覧会での日本部門を担当した。平成 26 年 3 月 14 日にパリ（フランス）で行ったピエール・ガルニエと日本についての研究発表をもとに、平成 28 年に『ピエール・ガルニエと日本』という研究書（L'Herbe qui tremble 社、2 冊）が出版された。ヨーロッパ（フランス、ベルギー、イタリア）と日本（主に武蔵野美術大学図書館）で発掘した未発表の資料を初めて紹介するこの本は、日仏詩の新たな見方を提示する研究書となった。

国際交流については、複数の講演会を主催して、意見交換を行い、本研究の大きなテーマである視覚詩の生成過程で重要な役割を

果たす共同作業という点について大きなヒントを得た。

具体的には、平成 25 年 6 月 4 日に、詩人ジャック・ルポー、平成 25 年 11 月 6 日にベルナルド・ヴィユ氏（ソルボンヌ大学、フランス）、平成 26 年 7 月 3 日にソフィー・レジヴィッチ氏（ジャック・ドゥーセ文学図書館副館長、フランス）、平成 28 年 5 月 23 日にヤン・バテンス氏（KU Leuven 大学、ベルギー）、平成 28 年 11 月 22 日にアン＝ガエル・サリオ氏（Duke 大学、アメリカ）を招聘し講演会を開催した。またその他にも、フランスで専門家に会い（との会合の場を設けて）、意見交換を行った（パリ東マルヌ・ラ・ヴァレ大学のキャロル・オルエ氏、パリ第 3 大学のエレーヌ・カンペニョール＝カテル氏など）。

また、平成 28 年には大規模なイベントを開催し、平成 28 年 4 月 9 日にフランスの詩人ジュリアン・ブレーヌの 20 年ぶりの来日を祝う日仏イベントを主催した。『日仏アヴァンギャルドの今』という題であったが、詩人の田名部信、出村紳一郎、砂原燎、菊池肇、ヤリタミサコ、中村恵一と評論家の金澤一志を招いて、1960 年代以降の日仏の視覚詩について論じた。逐次通訳付きで開催された本イベントは、60 人程度の聴衆が集まった。最後に、平成 28 年 5 月 21 日に、平成 25 年に亡くなったパリ第 7 大学名誉教授アン＝マリー・クリスタンに捧げる国際シンポジウムを開催し、その際に視覚詩をテーマとした。本研究課題の研究代表者のほかに、吉田典子（神戸大学）、千葉文夫（早稲田大学）、森田直子（東北大学）、北村陽子（早稲田大学）、吉村和明（上智大学）、野村正人（学習院大学）、谷川多佳子（筑波大学）、ユン＝ジュン・ドウ（仁荷大学、韓国）イアン・バテンス（KU Leuven 大学、ベルギー）、寺田寅彦（東京大学）が参加した。

本研究は 16 世紀以降の視覚詩を検討することを目的としていたが、調査を進めていくうちに、20 世紀のアヴァンギャルド運動において視覚詩が大きな意味合いを持っていることが明らかになった。その関係をさらに深く理解するために、20 世紀の視覚詩をこれからの研究課題とする予定である。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 10 件）

Simon-Oikawa Marianne, « Adam, ou l'homme des premières fois : Les Mémoires d'Adam et les pages d'Ève de Pierre Albert-Birot », *Sarrazine*, 査読有, n°15, octobre 2015, p. 201-206

Simon-Oikawa Marianne, co-direction avec

Hélène Campaignolle-Catel du n°8 de la revue *Textimage* (« Poésie et image à la croisée des supports »), hiver 2017, 査読有.

<https://www.revue-textimage.com/sommaire/sommaire.htm>

Simon-Oikawa Marianne, « L'image écrite dans les livres de poèmes de Pierre Albert-Birot », revue *Textimage*, n°8 dirigé par Hélène Campaignolle-Catel et Marianne Simon-Oikawa (« Poésie et image à la croisée des supports »), hiver 2017, 査読有

Simon-Oikawa Marianne, « L'allumette et le pyrogène : Le Japon de Pierre Albert-Birot », *Revue de langue et littérature françaises*, 査読有, n°49, Société de Langue et Littérature Françaises de l'Université de Tokyo, octobre 2016, p. 671-687

Nakaji Yoshikazu, « De la modernité du poète en prose », *L'Année Baudelaire*, 査読有, n°18-19, 2014-2015 (« Baudelaire antimoderne », sous la direction d'Antoine Compagnon avec la collaboration de Matthieu Vernet, 2015, p. 293-306

Nakaji Yoshikazu, « La poésie d'une langue à l'autre : recherche, traduction, réinvention », *Nichifutu Bunka*, revue de collaboration culturelle franco-japonaise, 査読有, n°84 (numéro spécial 30<sup>e</sup> anniversaire du Prix Shibusawa-Claudel), Maison franco-japonaise, mars 2015, p. 221-227

塚本昌則, 「まどろみの詩学—ブルーストとヴァレリーにおける夢」, 『言語文化』第32号「特集ブルーストと二十世紀文学」, 明治学院大学言語文化研究所, 2015年3月, p. 59-77

Tsukamoto Masanori, « La photographie dans l'œuvre critique de Valéry », *Textimage*, n°8 dirigé par Hélène Campaignolle-Catel et Marianne Simon-Oikawa (« Poésie et image à la croisée des supports »), hiver 2017, 査読有  
[http://revue-textimage.com/13\\_poesie\\_image/tsukamoto1.html](http://revue-textimage.com/13_poesie_image/tsukamoto1.html)

野崎 歆, 「文学部と人文知の挑戦」, 『UP』, 査読なし, 第43巻第10号, 通巻504号, 2014年10月, p. 1-4

野崎 歆, 「ブリュッセルを爆破するべきか? —ジャン=フィリップ・トゥーサンからのメッセージ」, 『早稲田文学』, 査読有, 第十次十四号, 通巻第1018号, 2016年春号 p. 192-195、

[学会発表](計12件)

Simon-Oikawa Marianne, « Idéogrammes spatialistes – Pour une poétique du signe flottant », 11 décembre 2015, colloque international « Écritures V », 10-11 décembre 2015, Université Paris Diderot – Paris 7 (Paris, France)

Simon-Oikawa Marianne, « Poetry and Space:

The Collaborative Poems of Niikuni Seiichi and Pierre Garnier », panel « From Modernism through Digital Culture in Japan: Poetry and the Visual » (Chair: Jordan Smith), The Second EAJS Japan Conference, 24-25th September 2016, Kobe University (Kobe, Hyogo)

Simon-Oikawa Marianne, « Espaces de Pierre Garnier », Séminaire de poésie moderne et contemporaine, Centre de recherche en poétique et histoire littéraire, 5 octobre 2016, Université de Pau (Pau, France)

Simon-Oikawa Marianne, « Les relations de Pierre et Ilse Garnier avec Niikuni Seiichi », 6 octobre 2016, colloque international « Pierre et Ilse Garnier, deux poètes face au monde », 6-7 octobre 2016, Université de Tours (Tours, France)

Nakaji Yoshikazu, « La poétique de la charité et ses limites », « Journées d'étude sur *Le Spleen de Paris* de Baudelaire », 6 décembre 2014, Université Paris Sorbonne (Paris, France)

Nakaji Yoshikazu, « Les inventions d'inconnu : Rimbaud face à Baudelaire », cycle de quatre cours, 6 et 13 avril, 4 et 11 mai 2016, Collège de France (Paris, France)

Nakaji Yoshikazu, « Sur une traduction d'*Une saison en enfer* au Japon », colloque international « Les saisons de Rimbaud », 16-17 mars 2017, Université Paris Sorbonne (Paris, France)

Nakaji Yoshikazu, « "Mon sort dépend de ce livre" : vie et art dans *Une saison en enfer* », conférence, 22 mars 2017, Université Paris Sorbonne (Paris, France)

Nakaji Yoshikazu, « Le poème en prose et le narratif : *Illuminations* », colloque international « Narration et invention en littérature et cinéma », 24 mars 2017, Université de Genève (Genève, Suisse)

塚本昌則, 「声、夢、ブクトウム—ヴァレリーの「内的対話」を通して」, 東京大学文学部仏文研究室主催のシンポジウム「声と文学—インデックスとイリュージョン:それは誰の声か」, 2014年9月27日, 東京大学(東京都文京区)

Tsukamoto Masanori, « Valéry et Proust — deux poétiques du rêve », Musée Paul Valéry, colloque « Paul Valéry et les sciences », 25 septembre 2016 (Montpellier, France)

野崎 歆, 「歌声と回想—ルソー、シャトーブリアン、ネルヴァル」, シンポジウム「声と文学」, 2014年9月27日, 東京大学(東京都文京区)

[図書](計18件)

Simon-Oikawa Marianne, « Les hai-kais de Pierre Albert-Birot : du détour par l'ailleurs à la découverte de soi », dans Éric Benoit (dir.), *Transmission et transgression des formes poétiques régulières*, coll. « Modernités », n°37, Université de Bordeaux, 2014, p. 221-226

シモン＝及川マリアンヌ(編)『詩とイメージ—マラルメ以降のテキストとイメージ』、水声社、2015年6月、246p.

シモン＝及川マリアンヌ、「ピエール・アルベール＝ピロー—詩集に書かれたイメージ」、『詩とイメージ—マラルメ以降のテキストとイメージ』、水声社、2015年6月、p. 73-96

Simon-Oikawa Marianne, « Pierre Garnier et le Japon », dans *Pierre et Ilse Garnier : le monde en poésie*, catalogue d'exposition à la Bibliothèque d'Amiens Métropole, décembre 2015, p. 23-28

Simon-Oikawa Marianne, Habilitation à diriger des recherches : « Écriture et image en France et au Japon : Poésie visuelle et jeux iconiques », garante Cécile Sakai, soutenue à l'Université Paris Diderot – Paris 7 le 29 juin 2016. Avec un manuscrit inédit intitulé « Par-delà les mers : les collaborations poétiques de Pierre et Ilse Garnier avec Niikuni Seiichi et Nakamura Keiichi (1963-2009) », 343p.

Simon-Oikawa Marianne, Pierre et Ilse Garnier, *Japon*, textes choisis, établis et présentés par Marianne Simon-Oikawa, *L'herbe qui tremble*, 2 volumes (*Japon 1 : les échanges*, préface de Giovanni Fontana, 372 pages ; *Japon 2 : à Saisseval*, préface de Francis Édeline, 612 pages), décembre 2016

Simon-Oikawa Marianne, « De *La Joie à La Lune* : les poèmes à voir de Pierre Albert-Birot », dans Hélène Campagnolle-Catel, Sophie Lesiewicz et Gaëlle Théval (dir.), *Livre/Poésie : une histoire en pratique(s)*, Paris, Éditions des Cendres, 2017, p. 105-112

中地義和、「La poétique de la charité et ses limites」, dans André Guyaux et Henri Scepi (dir.), *Lire « Le Spleen de Paris » de Baudelaire*, Presses de l'Université Paris-Sorbonne, 2014, p. 13-124

中地義和、「Une saison en enfer」, *Dictionnaire de Rimbaud*, sous la direction de Jean-Baptiste Baronian, Robert Laffont, coll. « Bouquins », 2014, p. 668-678(辞書項目)

Yoshikazu Nakaji, « Rimbaud autocritique », dans Olivier Bivord (dir.), *Rimbaud poéticien*, Classiques Garnier, 2015, p. 91-99

塚本昌則、「ヴァレリーと石川淳—精神をめぐって」、『日仏翻訳交流の過去と未来—来るべき文芸共和国に向けて』西永良成・三浦信孝・坂井セシル編、大修館書店、2014年、p. 73-90

塚本昌則、「ヴァレリーと写真」、『詩とイメージ—マラルメ以降のテキストとイメージ』マリアンヌ・シモン＝及川編、水声社、2015年、p. 213-226

塚本昌則(訳) アンドレ・ジッドノピエール・ルイスノポール・ヴァレリー『三声書簡 1888-1890』(松田浩則・山田広昭・森本淳

生との共訳) 水声社、2016年、695p.

塚本昌則、「声と文学—拡張する身体の誘惑」(鈴木雅雄との共編著)平凡社、2017年、584p.

野崎歎、秋山聰・野崎歎編、『シリーズ人文知 2 死者との対話』東京大学出版会、2014年、227p.

野崎歎、「シリーズ刊行にあたって」 p.i-iii; 野崎歎『『死者との対話』とは何か—ロラン・バルトからシャトーブリアンへ』 p. 1-19

野崎歎、「谷崎潤一郎と異国の言語」中公文庫、2015年、248p.

野崎歎、「歌声と回想—ルソー、シャトーブリアン、ネルヴァル」、塚本昌則・鈴木雅雄編『声と文学—拡張する身体の誘惑』平凡社、2017年、p. 256-275

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/futsubun/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

MARIANNE SIMON・O(SIMON-OIKAWA, Marianne)

東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授

研究者番号：70447457

### (2) 研究分担者

月村 辰雄(TSUKIMURA, Tatsuo)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授

研究者番号：50143342

中地 義和(NAKAJI, Yoshikazu)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授

研究者番号：50188942

塚本 昌則(TSUKAMOTO, Masanori)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授

研究者番号：90242081

野崎 歎(NOZAKI, Kan)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授

研究者番号：60218310